
神樹ユグドラシル

時雨彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神樹ユグドラシル

【Nコード】

N3368F

【作者名】

時雨彼方

【あらすじ】

普段ゲームばかりしている高校生がオンラインゲームの抽選に選ばれ、そのゲームでの冒険を描いたもの。

プロローグ

『これがオンラインゲームに革命を起こすタイトル！ その名も -
- 新樹ユグドラシル - - です！』
あるゲームショーの一角でそのキャンペーンは行われていた。

僕は、そのゲームショーで一番注目されていたタイトルに釘づけ
になっていた。

そのゲームはイベントに出る前からインターネットの掲示板やゲ
ーム雑誌ではものすごい注目を集めていたゲームだ。そのゲームは、
世界初の体感オンラインRPGゲーム。視覚、聴覚、触覚、味覚、
痛覚等を実際にその身に疑似的ながら感じられるという画期的なゲ
ーム。それ自体は大掛かりな機械を使用するものではなく、ヘルメ
ットにマイクとヘッドフォン、大きなサングラスが付いたものと言
ったら分かりやすいだろうか、それにLANケーブルを繋げるとい
う至って簡単な物だ。どうやって痛覚などを疑似発生させるのかは
企業秘密ということだが、噂ではヘッドセットから脳に信号を送る
とかなんとか……

そんな事は事前知識として知っていた。問題はそのゲーム内容だ。
全く公表されておらず、しかもc を行っているのにネットに情報
が出ていない。理由はログアウト時にゲームの内容を記憶から消す
ということをしている。そして、ログイン時にゲームの記憶を復元
させるという、説明を受けてもさっぱりわからなそうな難しい技術
を使っているらしい。

ゲームのほんのさわりの内容とオープン の開始日が発表とあっ
て、今回のイベントは僕のようなゲーム好きは特に注目していた。

内容は至ってシンプルなオンラインゲームでクエスト受注や洞窟、ダンジョン散策等だった。

(以外に普通なんだな……)

オープン は抽選で2000名。その抽選はゲームショウとネット
トで同時募集をしその中から抽選ということだったので、僕は早速
応募しその日は帰路についた。

その後抽選に見事選ばれゲームを開始することとなる……

プロローグ（後書き）

本作が処女作で文才が無く分かりにくい点があるかと思えます。その時は、お声かけいただけるとうれしく思います。よろしくお願いします。

注意事項

ご挨拶

この度は弊社製品のオープンにご当選おめでとうございます。
本製品は脳に本製品を介し創り出されたバーチャル世界を自由に冒険する事が可能です。プレイされる前に必ず本説明書をご覧下さい。

注意事項

バーチャル世界においてプレイヤーが感じる現象又記憶、記録の一切は現実世界（以下リアル）には、思い出し又持ち出せないようになっていきます。ですが、一度ゲームにログインするとそれまでの記憶、記録といったものはすべて復元されます。

ですが、極稀にリアルにおいて思い出してしまう現象が見られております。その様なことがあつた場合は弊社にご連絡の上こちら指定の病院に行つていただき、脳の検査をしてください。

本製品について

本製品は北欧神話に出てくる世界を取り入れております。その為それに似た言葉が多く出てきます。ただ、所々名前を変えているために不自然な名前の地名等が出てくる場合がありますがこちらの意図したものですので、気にせずプレイをしていただければと思います。

プレイヤー情報

プレイヤーの本製品においてのゲーム内容姿は、弊社が用意したパーツ（顔、髪の色長さ、身長、体格．．．etc）にて自由に選んでいただけます。ただし、声に関してはリアルを忠実に再現した形になります。これは、本製品がボイスチャットと同様な形を取らせていただくためです。

味覚、嗅覚、視覚、触覚、痛覚、歩行速度、攻撃速度におきましてはプレイヤーのステータスが同一のものであればすべて平等に一定の値を取らせていただいております。

怪我や死亡による痛覚のレベル

本製品においての怪我又は死亡（以下ダメージ）による痛覚のレベルはそのダメージに見合った形になります。ただ、その痛覚によってリアルでの激痛又ショック症状による死亡には至らないように設定されております。

最後に

本製品はオンライン上でのゲームとなりますので、目の前の相手がりアルに存在する人間だということをきちんと認識していただき、他のプレイヤーに迷惑のかかるような行為をせずに本製品をプレイしていただきたいと思います。

皆様にこの製品が楽しんでいただけるとうれしく思います。ありがとうございました。

注意事項（後書き）

週2〜3話のペースで更新できればいいなと思っています。
所々おかしな点がありましたら改善していきたいと思しますので、
気づくようなどころがあればお知らせいただけると幸いです。

第一章 旅立ち

目の前には青い海、白い雲、どこまでも広がる広大な世界。それ
は見る者を圧倒するほどの美しくい世界。本当にゲームなのか疑わ
しい……

(そんな、世界を想像したんだけどな……)

彼、スフィアの目の前にはそんな理想とは違う世界が広がって
いる。

そこは、木造で出来た小学校の教室に似た場所の真ん中にカウ
ンターがありその向こう側にニコニコと笑顔の女性が立っている。ス
フィアの他に麻布で出来た服に皮で出来たズボン、それに短剣と思
われる武器を腰に差したプレイヤーの姿が見える。

黒髪に黒い瞳で人懐こそうな顔をした男とエメラルドグリーンの
髪にコバルトブルーの瞳で少したれ目の女。

(俺と同じ服装か。つーことは、あれも新規プレイヤーだな。)

男女は、スフィアを確認するとヒソヒソと何かをしゃべった後彼
に近づいてきた。

「すみません、あなたも新規のプレイヤーの方ですよね？」

「ええ、そうですか？」

男女二人組は、ニコっと笑った後自己紹介をはじめた。

「はじめまして、僕も今日からゲームを始めたクロガネって言いま

す。」

「私は、ユリです。よろしく願います。」

「俺は、スフィアって言います。よろしく願います。」

自己紹介を終えたスフィアは先ほどのカウンター的女性を指差し「話しかけますか？」と二人に投げかけた。それに二人も同意したのを見て、NPCに近づき話しかけた。

「えーっと、すみません。このあとどうしたらいいでしょうか？」

「はい。新規のプレイヤーの方ですね。新規のプレイヤーの方には洩れなく初心者講習を受けていただいています。こちらの講習は、こことは別の所に転送され基本コマンド、戦闘、アイテムの交換等ゲームに必須のものを習っていただきます。よろしければ、あなた方三名を転送します。」

「よろしく願います。」

「分かりました。それでは初心者講習場所に転送いたします。行ってらっしゃいませ。」

三人は白い光に包まれその場から転送された。

それから、講習が終わった三人はユグドラシルの世界を冒険する。

第一章 旅立ち（後書き）

本文の一部を修正しました。

本文の文章を一部追加、削除しました。

初心者講習・基本編（前書き）

読んで行く上で必要な？と思われる物です。

主人公等は講習後に冒険という形で始めるので、今後この手の説明はいくつか省いていくかもしれません。

初心者講習・基本編

まずは、基本について。

ユグドラシルにおいての基本とは、「アイテム、基本ステータス、ゲーム内掲示板、フレンド、マップ、他キャラクター名を出すためのコマンド」「アイテムの取得」「アイテムの破棄」「アイテムを使う」「アイテムを装備する」「アイテムを売る」「他のキャラクター名の確認」「フレンド、ブラックリスト登録」「ゲーム内掲示板の使い方」となります。

「アイテム、基本ステータス．．．e t cを表示するためのコマンド」

「ブック」と発言することで、「アイテム、基本ステータス、ゲーム内掲示板、他キャラクター名を出すためのコマンド、ヘルプ」の表示ができる開いた本が目の前に展開されます。そこから欲しい情報の物を手で触れれば、その項目が表示されます。

「フレンド」と発言すると目の前にコルクボードの様な物が現れ、そこに現在ゲームにログインしているフレンド登録した人が白く、ログアウトしてる人は黒く表示されます。ブラックリストの表示はボードの右上に「ブラックリスト」という項目があるのでそれを手で触れると表示されるようになっていきます。

「マップ」と発言すると目の前に周囲10kmほどを表したマップが表示されます。それよりも細かく又は大きく表示したい時は右

側に表示される倍率バーを上下に動かす事で縮尺を変えることが可能となります。

アイテム：使用すると消失するもの、装備品、特定イベントを起こす際に必要となるもの等を示します。表示の方法は名前とグラフィック、効果が書いてあるカードになって表示されます。

「アイテムの取得」

アイテムの取得には3通りあります。<NPCから買う><他のキャラクターから買う><モンスター、イベントからの取得>になります。

<NPCから買う>は、その言葉の通りアイテムを販売しているNPCからアイテムを購入できます。購入の際は<アイテムを買う>と話しかけると購入項目が出てきます。

<他のキャラクターから買う>は、他キャラクターの露店または直接の取引によって購入する方法です。

<モンスターからの取得、イベントでの取得>モンスターとの戦闘や特定イベント等で出現するアイテムは触れる事で取得が可能です。この時特に必要な場合、そのままにしておくとも1分でアイテムは消失します。

「アイテムを使う」

アイテムの項目を出して使いたいアイテム名を触れて<使う>の項目を選択することで使用することができます。消費型アイテムを使った場合使用回数が決められてるものでなければ消失します。

「アイテムの破棄」

これもアイテムの項目を出して破棄したいアイテム名を触れて「破棄」の項目を選択することで破棄できます。ただし、破棄したアイテムについてはその後再取得を行うことはできず完全に消失しますので気を付けてください。

「アイテムを装備する」

アイテム項目で装備したい装備品を触れて「装備」の項目を選択することで装備できます。選択前に既に装備していた装備品はアイテム項目に戻ります。

「アイテムを売る」

アイテムの売買の方法は二通りあり、「NPCへの売買」「他のキャラクターへの販売」となります。

「NPCへの売買」については、アイテムを販売しているNPCに話しかけるとときに「アイテムを売る」と話しかけると項目が売るための項目が出てきます。

「他のキャラクターへの販売」は、「直接販売」「露店販売」の2通りがあります。

「直接販売」は、相手キャラクターの名前を言った後に「直接販売」と発して相手はその売買を承諾すれば「直接販売項目」が出るのでそこで売りたいアイテムを選んで金額を設定すると売ることができます。

「露店販売」は、「露店販売」と発言すると「現在の所持アイテム」が左側に「露店販売のアイテム」が表示されます。所持アイテムを選択して「露店をする」を選択すると露店することが可能とな

ります。露店中は他のキャラクターへ話しかけることと掲示板を見ることが以外はできなくなります。

「他のキャラクター名の確認」

他のキャラクター名の確認は<ブック>を開いて<キャラクター名の確認>を選択することで周囲10mまでのキャラクターの名前が頭の上に表示されます。これは、30秒すると自動で消えます。常に表示するようにすることはできません。

「フレンドリスト、ブラックリスト登録と削除」

フレンドリストに追加したいキャラクター名を発言して<フレンド>と続けて言う事でフレンド登録がされます。その際に相手に承諾の有無の項目が表示され、<OK>を選択した場合にのみ追加されます。片方が追加すると両方に追加されますので両名が登録する必要はありません。削除に関しては、<フレンド>の項目を表示して削除したい名前を選択して削除の項目を選択すると削除されます。

ブラックリストの登録は、<フレンド>の項目を表示してブラックリストに登録したい名前を選択して<ブラックリストに追加>の項目を選択すると追加されます。削除に関しては<フレンドリスト>と同じ方法です。ブラックリストへ登録されると取引もパーティーへの加入、ギルドへの加入もできなくなります。

「ゲーム内掲示板」

<ブック>を表示して<ゲーム内掲示板>を選択すると表示されます。

掲示板には<運営からのお知らせ><パーティ募集><攻略><

売買>の4つの項目があります。

<運営からのお知らせ>は、イベントやゲーム内変更点などがあった場合書き込みがあります。

<パーティ募集>は、パーティを募集したい時に使う掲示板です。

<攻略>は、自分で知った情報や知りたい情報等、ゲーム攻略に必要な情報の収集の際に使う掲示板です。

<売買>は、アイテムを直接取引したい又はどんなアイテムを露店している等、取引に関しての掲示板となります。

以上が基本編となります。他に知りたい情報がある場合はヘルプを参照ください。

初心者講習・基本編（後書き）

発する 発言する に修正しました。

初心者講習・装備戦闘編（前書き）

え、大分長くなってしまっていますがつぎのステータス解説で終わりますので、もう少しだけお付き合い下さい。

初心者講習・装備戦闘編

次に<装備品><武器><スキル><戦闘>について

まず、装備品にはいくつか種類があります。

<手持ち装備><鎧・服><籠手><ズボン・スカート><ブーツ><指輪><帽子><イヤリング><ブレスレット><ファッション>があります。

装備品：身につけることでその効果を発するもの。ユグドラシルでは、装備品に重量がついており、自分が装備可能な重量までしか装備できない。

<手持ち装備>

手持ち装備とは、剣や杖などの武器を総じて言う物。他には盾などの防具もこれに類する。

但し、戦闘用の籠手・グローブを装着している時は装備できない。

<鎧・服>

上半身を守るための防具。軽装↷重装の物まで様々。ズボン・スカートとセットの物が多い。

<籠手・グローブ>

手を守るための防具。軽装↷重装の物まで様々。但し、指輪・ブレスレットとの併用はできない。

例外として戦闘用の籠手・グローブは手持ち装備を装備できなくなるが素手での攻撃強化が可能。但し、防御力は普通の籠手・グロ

ローブよりも劣る。

<ズボン・スカート>

下半身を守るための防具。軽装〜重装の物まで様々。鎧・服とセツトの物が多い。

<ブーツ>

足回りを守るための防具。ファッション感覚の物〜武器などの仕込んである物まで様々。

<指輪>

装備することでステータスの向上ができる防具。但し、籠手・グローブとの併用はできない。

<帽子>

頭を守るための防具。ファッション感覚の物〜フルフェイスの物まで様々。但し、フルフェイス系や耳を覆う形の物を装備するとイヤリングを装備できなくなる。

<イヤリング>

装備することでステータスの向上ができる防具。但し、フルフェイス系や耳を覆う形の帽子を装備すると装備できなくなる。

<ブレスレット>

装備することでステータスの向上ができる防具。但し、籠手・グローブとの併用はできない。

<ファッション>

戦闘には役に立たないが個性をアピール出来るもの。これについては例外で重量が無い。

他の装備品とも干渉しないため、自由に着脱が出来る。

<武器>について

ユグドラシルでは様々な武器があります。それは、剣などの代表的な物や銃などの物まであります。すべての種類は公表できませんが、きつとあなたの装備したい武器があるでしょう。それはこれからの冒険のなかで入手してください。

<武器>

ユグドラシルでは二刀流など両手に武器を装備することも可能。斧などの重装備にあたるものや弓矢などの両手を使う武器は両手で一つの武器を装備する形になる。

ただし、重装備の場合は片手装備可能ステータスを満たしている場合は例外として片手で装備できる。この場合は片手装備と同じ扱いになるので両手に武器を装備したり盾を装備することが可能になる。重量についてはそのままの重量が反映される。

魔法が可能となる装備（以下杖と略）と魔法が不可能な装備（以下剣と略）の組み合わせは出来ない。杖と杖の組み合わせは可能。杖と盾の組み合わせも可能。

<スキル>について

ユグドラシルでは、スキルはレベルアップによっては覚えませんが、スキルは各種武器に固有の物（重複するものも有り）があります。

それは基本的には、装備を解除した時点で使えなくなるのですが、
熟練度>を鍛えることで装備解除した後でも使えるようになります。

<スキル熟練度>

スキルを使用することによって、そのスキル熟練度が上がりスキル威力向上や命中率UP等様々な特典がつく。熟練度は0～10までのレベルが有りレベル5になると装備解除しても使えるようになる。レベル0と10のスキルでは威力が2倍と命中率は1.5倍ほど違う。

例えば魔法の<熟練度>を鍛えることで剣を装備していても魔法が使えるようになります。ただ、剣のスキルを斧や銃などで使用しよ
うとしても出来ないものもあります。これはスキルに説明があるのでそれを見て判断してください。

鍛えたことで覚えたスキルを覚えられる装備を解除して別の装備
(素手を含む)で使おうとするとその攻撃力は半分以下になります。
(例：魔法スキルレベル10の威力のスキルを剣で発動した場合魔法スキルレベル5の威力になって発動される。剣スキルレベル10のスキルを杖で発動した場合剣スキルレベル2の威力となって発動される。)

ただし、同一系統の種類の種類であればスキルをそのままの威力で使用できます。(例：片手剣スキルを両手剣でつかうなど)

<戦闘について>

ユグドラシルでの戦闘は特に規制はありません。例えば武器を投
げることをするのも可能です。ただし、投げた武器がモンスターに
ヒットした場合はその武器は消失します。外れた場合は、カードと
なつてその場に残ります。

装備の着脱も可能です。逃げる場合などはその場から離れてモンスターとの索敵範囲から出ればそれ以降は追いかけられず攻撃されません。

対人戦闘は、街中では決められ場所でフィールド上では本人の明確な意思がある場合のみ適用されます。ただし、フィールド上で対人戦闘を行い相手を倒した方はペナルティとして1時間の間経験値とアイテムの取得、街中でのNPCを含めた取引行為、他プレイヤーからの蘇生と回復行為を強制的に剥奪され、頭の上に「現在制限中に尽き」の表示がされます。フィールド上でのプレイヤーキル行為を10回行くと24時間の剥奪制限が付きます。

以上、さらっと戦闘や装備についての説明になります。もっとくわしい事はヘルプを参照下さい。

初心者講習・装備戦闘編（後書き）

スキルについて一文追加。

初心者講習 - ステータス

これが、最後の講習になります。

<ステータス>

Level：経験値を取得することで上昇する。一つ上がる毎にLP、SP以外のステータスで好きなものに3ポイントまで振り分ける事が出来る。

経験値：敵を倒すことで入手する事ができる。1000ポイント貯めるとLevelが上がる。ただし、死亡すると50減る。

LP：ライフポイント。攻撃を食らうことで減少する。Levelの上昇によって上昇する。一定割合以下になるとアラームが鳴るようになっていている。0になると死亡判定となる。時間によって自然回復する。

SP：ソウルポイント。スキルを使用すると減少する。Levelの上昇によって上昇する。0になるとLPの自然回復量が減少する。フィールド上では回復せず、アイテムか宿屋、街中でしか回復しないようになっていている。

物理攻撃：物理的攻撃のダメージに関係。高ければ高いほど物理攻撃力が高くなる。尚、高重量級両手装備を片手で装備する際と総装備可能重量に関係するステータス。

物理防御：物理攻撃のダメージの減少に関係。高ければ高いほど物理ダメージが減少するステータス。

魔法攻撃：魔法攻撃のダメージに関係。高ければ高いほど魔法攻撃のダメージと命中率、状態異常発生率が上昇するステータス。

魔法防御：魔法攻撃のダメージ減少に関係。高ければ高いほど魔法攻撃のダメージと命中率、状態異常発生率が減少するステータス。

スピード：物理攻撃の命中率、クリティカル率、物理攻撃速度、歩行速度に関係。高ければ高いほど、物理攻撃の命中率、クリティカル率、物理攻撃速度、歩行速度の上昇に加え、相手の物理攻撃命中率、クリティカル率を減少させる。

以上、ここまでが初心者講習となります。

長々とありがとうございました。

初心者講習・ステータス（後書き）

長々とありがとうございました。いよいよ、次から本編です（汗
一文分の追加と修正。

一部 砂浜と草原（前書き）

サブタイトルが思いつかない・・・
なんか本文とあんまり関係ないような感じでも許してください・・・

一部 砂浜と草原

光に包まれ三人は現れた。

そこくシリルの砂浜へは、真つ白な砂浜に少し波が起つ青く透き通った海、雲一つ無い空がどこまでも続く観光地として有名なところである。

「綺麗……」

ユリは、誰よりも感動しているのかうっすら涙すら浮かべている。

「ほんとに現実離れた光景だな……」

「まったく、その通りですね……」

三人は同様の感想を述べてその場に立ち尽くしていた。目の前に広がるのは本当にそれがバーチャルで出来た世界とは思えないほど、本当に綺麗な物だった。

それから、少ししてスフィアがあることに気づいた。

「なあ、街が見当たらないか？」

そう、街が見当たらない。三人は小さな陸、というには小さい五人がせいぜいの場所に立っていて、その前には細い道の様な物があるだけ。しかも、その道はまっすぐ砂浜に繋がっているだけのようだ。砂浜には同じような格好をした人やそれとはまたすこし違った格好をした人がまばらに居るだけだった。

「とりあえず、砂浜に出てあの人たちに話を聞いてみるかしかない

かな？」

「そうだね。僕もスフィアの意見に賛成かな。」

「ていうか、それしかすることないしね。」

最後にユリが苦笑しながら同意したのと同時にスフィアは歩き出していた。

その道は100mくらいの道であり時間はかからずに砂浜についた。

「思っていたよりも短かったね。とりあえず、あそこの人に聞いてみよう。」

スフィアは前方の赤いセミロングの落ち着いた感じの女性を指差した。

「数多く居る男じゃなくて二、三人しか居ない女性を選ぶなんて、狙ってるの？」

クロガネは茶化すように話しかけたが、当の本人は「そんなわけではないだろ」と非難の目を浴びせさつさと歩き出した。

「すみません。少しよろしいですか？」

「はい？何か尋問でもされるのかしら？」

その女性は透き通った綺麗な声でくすくすと微笑むように答えた。スフィアはその冗談に付き合つか付き合わず普通に接するべきか一瞬考え、冗談に付き合うように用件を話した。

「まあ、あなたの様な方を尋問できるならうれしく思いますけど、残念ながらそういう用件じゃないんです……」

「まあ、残念。それで私に用ってなにかしら？」

「ここから一番近い街を教えて欲しいのですが？」

「ここからだ、ミッドガルズが一番近いわね。東にまっすぐ行って砂浜を抜けて、抜けたら西にすこし行ったところにあるわよ。」

「ありがとうございます。さっそく行ってみたいと思います。」

三人は口々に御礼を言っ少し歩き出したところで後ろからの声に振り向く。

「そういえば、言い忘れてたけどマップを見れば一発で分かるわよ。」

道を教えてくれた彼女は、そういうとウィンクしながら手を振ってくれた。

三人はそれに答えるようにお辞儀をし軽く手を振って歩き出す。

「マップの存在すっかり忘れてた……」

「同感だよ……」

「さっき、教わったばかりなのにね……」

三人は何か彼女に悪いことをしたと思いながら歩き出す。雑談を

しながら砂浜を抜けたところで三人はまた、感動で息を呑んだ。

<ポポの草原>そこは、まっ白い毛玉のような遠くから見るとタンポポの綿胞子のようなものが浮き沈みしている草原。草原に浮き沈みしているのはポポと言うモンスターなのだ。ノンアクティブのためそこで休憩をしたりデートに使われることが多い場所である。

「この一面緑の絨毯にも驚かされるけど、そこに浮き沈みするポポもまたかわいらしいね。」

クロガネの一言に二人は納得するようにつなずいた。

「とりあえず、街についてからもう一回来ないか？」

スフィアの言葉に頷くと三人は西に見えている街を目指して歩き出した。

その途中で何匹かポポを見かけるたびにユリが「かわいい！」と言って立ち止まるので普通よりも倍以上の時間をかけて三人は街に着いた。

「ここがミッドガルド……」

三人はこれから始まるであろう新たな出会いに心を躍らせ街へと入っていくのだった……

二部 ミッドガルド

< 商業都市ミッドガルド >

主に商業が盛んな街でユグドラシル内では1、2を争うほどの大きさの街。ただ商業が盛んというだけではなく、クエストを発行している<センター>の本部や<ミッドガルド城>と呼ばれるGVG（ギルド対抗戦）イベントを行うための施設があるためにプレイヤーの多くはここを利用することが多い。

「でかい……」

三人はミッドガルドの門を潜ると開口一番それを口にした。

「最初の街だし、もっと陳腐なつていうと失礼だけど村的なモノを考えてたんだけど……」

クロガネの言葉に二人は同意を示す。

「と、とりあえず回ってみるか？」

スフィアの言葉に頷き歩き出す。

周りの街並みはどこか中世のヨーロッパを思わせるようなつくりをしているが、どこか現代風の感じもある。建物には「宿」や「武器」などの木で出来た表示板が掲げてあり分かりやすく作られている。街道には商人のような格好をしたプレイヤーたちが沢山軒を連ねていて「安いよー」「珍しいものあるよー」など、賑わいを見せていた。

「うへえ、いっぱい店とかあるなあ。」

「うん。すごいよね！ あ、見て見て、クレープ屋さんだ。二人とも食べていけない？」

クレープ屋と聞いて二人は、まさかと思いつながらユリが指を指すほうを見ると確かに「クレープ屋」と看板が書かれた屋台がある。

「いいですよ。ただし、最初に支給されたお金はそんなに多くないですからあまり沢山食べないくださいね？」

クロガネにそういわれ「わかってますよー」とペロツと舌を出して答えるユリ。それから小走りにクレープ屋に着いたユリは何を食べようか20分迷って二人を呆れさせた。

ユグドラシルでは食事や睡眠の概念があります。そのためこの街でも宿屋と食堂の様な食事が出来る施設が併設されているのが一般的です。

睡眠については約30分睡眠を摂ると自動的に起きる仕組みになっています。

<支給されたお金>と言うのは、初心者講習を受け終わると1000ガイスと言うユグドラシルの通貨が支給されるのでその事を示したものです。

「さて、食い終わったしもうちょっと見て回るか？」

「それじゃあ、お城に行ってみたいな！」

そういうとさっさと歩き出してしまふユリを見て「女の子だな」と思うスフィアだった。

程なくしてミッドガルド城に着いた三人だが、その大きさを見て啞然とした。高さは6階建てビルに相当し幅は東京ドームはあろうかという大きさがある。

ユリが門前に近付くと二人の大柄で幅広の剣を帯剣している騎士に止められた。

「待たれよ！ これより先は王の許可があるもの以外は通せん！」

「王の許可？」

「そう、現在のミッドガルド王、<シュバルツ>王の許可を得てからまた来たれよ。」

それからユリが押し問答を続けていたが無理だと判断して城から離れることに決めた。

「まったく、なんなのよ！」

「しょうがないって。とりあえず今日は疲れたから休もうよ？」

「ん、そうね。私は構わないけど。」

「賛成です。また、ゆっくり情報収集しましょう。」

そういうと三人は、宿屋で休息を摂ることを決めた。

二部 ミッドガルド（後書き）

変に改行されていた部分を修正

三部 王と城とGVG（前書き）

連休中PCをまったく触れなかったため更新ができませんでした。
これからも不定期更新になってしまうと思いますが、よろしく願
いします。

三部 王と城とGVG

30分後宿屋での休息を終えた3人は城に入る方法の情報を得るために掲示板を見ていた。

掲示板での検索を開始して10分ほどたったところでスフィアが「見つけた」と言うので二人もそのスレッドナンバーを控え検索をして各々そのスレッドを見ていた。

NO.223 ミッドガルド王とGVGについて カラス

Re:ミッドガルド王とGVGについて カイエン
ありがとうございます カラス

ミッドガルド王とGVGについて カラス

私はゲームを始めてまだ2日目なのですが城に入ろうとしたら「王の許可を得てから」と言われ帰されてしまいました。「王の許可」とはなんなのでしょう？GVGと関係有るのでしょうか？城になにがあるのでしょうか？

もし、ご存知の方で教えていただける方はよろしくお願いします。

Re:ミッドガルド王とGVGについて カイエン

はじめまして。とりあえず、私の知る範囲で質問に答えさせていただきます。

「王の許可」について：現在、ミッドガルドを統治している「王」こと全ギルド中最強のギルドマスターへの謁見許可もしくは王直接からの城への招待、王と同じギルドに属すること、王のギルドと交遊状態にあること、現在はこの4点が「王の許可」になります。

城内：私の知る限りでは、プレイヤー個人個人への部屋の配給と城内限定アイテム、クエストの配給があるそうです。

G v Gとの関係：先に述べたとおり全ギルド中最強のギルドがミッドガルドを統治することになるのでその最強ギルドを決めるために必要になります。よって、密接な関係にあると言えるでしょう。現にG v Gの覇者がミッドガルドを統治しています。蛇足ですが、G v Gは2週間に1度の割合で開かれています。

私の知るところはこの辺ですね。参考になればと思います。

ありがとうございました カラス

カイエン様、大変分かりやすい説明ありがとうございました。これにてこのスレッドを閉めさせていただきます。

ふう、とスフィアは一息つくくと二人を見た。クロガネは、なるほど、と言った顔をしているがユリは表情が晴れない。どうしたのかと様子を伺っていると、いきなり大きな声でユリは宣言した。

「3人でギルド作って王者になる！」

二人は、ユリの言った意味を理解するのに数秒を要した。スフィアはため息をついてユリを諭すように言った。

「あのな、たった3人のギルドで王者になれるわけないし。そもそも、はじめたばかりでレベルは1、戦い方も武器の使い方そのままならない。そしてギルドの作り方も分からない。そんな状況でどうしてそういう言葉が出るの？」

「関係ない！ 強くなればいい！そして仲間を集めればいい！」

にかつと笑う彼女を見てスフィアは何を言っても無駄だと思った。そうして息巻いているユリを眺めている二人に大柄で白い短髪の青年と言うには少し老けてる感じの男が話しかけてきた。

「あの譲ちゃんの言ってることもあながち出来ないことではないよ。なにせ、今統治しているギルド<最期の聖戦>は城を落城させた時はたった5人の少数ギルドだった、今も変わらず。しかも現在3回防衛中。親睦も作らずただひたすらに最強の名を体言しているやつらもいるのさ。」

そう言い肩をぼんぼん、と叩くと何処かへ行ってしまった。それを聞いていたユリはさらに拍車がかかる。

「じゃあ、私たちは新時代の幕開けって事で3人で最強になりましたよー！」

何か、かなり無謀な事を空を見ながら両手を突き出し言っているユリを尻目に二人は、ため息をついていた。そんな事を知らないユ

りは二人の方を見て、

「まず、レベルとかあげるのにセンター行ってクエストでもやろう。」

「

至極最もな事を言つと二人の了承を得ないでスタスタと歩いて行つてしまった。

「クロガネ、前途多難つてこついつこと言つのかな？」

「ええ、まあ……」

二人はもう一度ため息を吐くと先に行つてしまったユリに追いつくように走つた。

四部 センター

程なくして三人はクエストを受けるためのセンターに向かって歩いていった。

「センターってどんなところなんだろうね」

「なんか、役所的な感じなんじゃないですか？」

「いや、案外すげー豪華絢爛で俺らみたいな服装のやつは受け付けないとか？」

三人はまだ見ぬセンターについて話を弾ませていた。

<センター>

クエストを受けることが出来るだけでなく、個人のお金やアイテムを預かる銀行のようなことやギルドの結成申請を受け付けている場所。その他にも色々役割がある。各街に必ず一つは存在している。基本的にはセンターでクエストを受注消化しお金を貯めて装備品等をそろえるのが常識である。

目の前にあるのは真っ白で覗き込めば自分を映し出せるくらいに

磨かれた石で出来ている宮殿と言っているにも過言ではない増築物がある。

三人は、感嘆としながら中に入った。

センターの中はとても広く1万人以上は収容できるのではないかなと思われるくらいだ。その中心には円状に受付窓口のようなものがあり各窓口には、その役割が書いてある札が立てかけてある。その周りを同じような服装をしたプレイヤーや如何にも高レベルプレイヤーと言った感じの人まで30〜50人ほどは居た。

三人は驚きながらもどうしたらいいか分らずに呆けていた。

「おう、その新規っぽい三人。もしかしてセンターは初めてか？」

いきなり後ろから話しかけられて三人はびっくりしながらも首を縦にコクコクと振った。

「ふむ、じゃああそのいんぷおめーしょんで詳しい話を聞くといいぜ？ ああ、なんでいんぷおめーしょんがひらがなっぽい言い方かって、なんとなくだよ。じゃあな。」

とても大きな声でガツハツハと笑いながらセンターの外に出て行った人を暫し見つめながら三人は男の人の言った事を反芻した。

「いんぷおめーしょんに行ってみるか。」

「スフィア君、ひらがなになってます。移ってますよ？」

「いや、あながち間違いでもないみたいだぜ？」

にやっと笑うとスフィアはある方向を指差して言った。その指の

先には確かに<いんふおめーしょん>と書いてある受付がある。なぜかひらがなである……

「まさか、本当にひらがなで書いてあるとは……」

「まあ、いいじゃないか。行こうぜ。」

いんふおめーしょんのNPCにスフィアは話しかけ選択項目を出した。その中のクエスト受注を選んでNPCの言葉に耳を傾ける。

「クエスト受注とはレベル又は難易度別に区分けされたクエストを受注することです。受注受付は<くえすと受注>と札が立てかけられている窓口になります。さらに詳しいことは<くえすと受注>窓口にてお伺い下さい。他になりますか?」

三人は他に何かないかと少し考えた後クロガネが興味本位にあることを聞いてみた。

「項目以外の質問も受け付けているのかな?」

「はい。答えられる範囲であれば平気ですよ。」

「では。何故、カタカナで書かれていてもいいはずの言葉がひらがななのでしょうか?」

純粋な疑問だった。他の二人も「確かにそうだ」という顔をして答えを待っていた。

「何故ひらがなか。それは、なんとなくです。そっちのほうに愛着が湧きそう! みたいな感じですよ。」

ニコッと笑った三人はNPCの出した答えに苦笑いしか浮かべられなかった。

「他に何か御座いますか？」

「いや、いいよ。ありがとう。」

三人はいんぷおめーしょんのNPCに御礼を言つとくくえすと受注の窓口へ向かった。窓口についた三人は驚いた。今までNPCの殆どは綺麗な女性だったのがそこにいたのは筋骨隆々のいかにも鍛え上げられた戦士といった感じのスキンヘッドが居たからだ。びつくりしている三人を尻目にそのNPCは他にはめずらしく自分から話しかけてきた。

「いよおう！ なんだい、今日はクエスト受けに来たのか？それとも冷やかしか？はたまた、俺と殺りあおうってか！」

なんだか、NPCらしからぬ言葉を吐かれたがスフィアはそれに負けず気丈に質問を投げかけた。

「あ、あのですね、クエストについて詳細を知りたい！」

「おー、初心者だったのか。おうけーおうけー教えてやるぜ。クエストってのは大別して二種類に分かれるんだ。1つは<レベル別>もう1つは<難易度別>だ。」

<レベル別クエスト>

その名の通り適正レベルが決まっているクエスト。主にモンスター討伐やアイテム採集などがこれに当たる。適正レベルよりも高いクエストや逆に低いものでも受けることは可能だが、高いものだと失敗の可能性が高いのと低いものだと報酬が減る等のリスクもある。基本的に適正レベルのクエストを行えばその時点での贅沢をしなければまともな装備とレベルになることができる。

< 難易度別クエスト >

E ~ AAA まで15段階の難易度が指定されているクエスト。Eの次はEEといった具合にアルファベットが多くなり更に若くなるほどに難しくなっていく。ちなみにEEEの次はDになる。特別イベントクエストとして稀にSランククエストが発生するが成功したものはまだ2、3人という少数しか居ない。

主に配達や搜索、作成のクエストがほとんど。

「フー感じた。あとクエストが終わり次第くえすと終了」の立て看板がある窓口について報酬を貰ってくれ。あと、クエストはどちらの種類もクエストを受けるかを決めたら俺に言ってくれれば現在あるクエスト一覧が載ったアイテムをそっちのスロットに入れさせてもらうぜ。まあ、クエスト受注次第アイテムはスロットから消失すっけどな。」

なるほどと三人は頷いて、どちらを受けるかを相談していた。そこへNPCがまた一声かけてきた。

「そういえば、三人でクエスト受けるようならまずはPTを作ってから話しかけな。そうじゃないと三人でクエストを受けられないぜ。あと、初心者は大体みんなレベル別からっていうのがセオリーだな。」

三人はNPCの言ったことを聞いて早速PTを組んだ。リーダーはユリ。そしてNPCの言った通りとりあえずレベル別クエストを受けることにしてその旨をNPCに伝えた。そしてスロットに入っているアイテムを使いクエストを調べる。

クエスト受注アイテムは本のようにになっている。上にはしおりの様な物が出ていて、そこには<レベル別><種類別><検索>と書いてあるが最初はレベル別順に並んでいるようだ。クエストは題目が書いてあってその隣に適正レベルが記載されている。

三人はとりあえず<L V 1 ~ 3 『ポポ討伐』>と書かれているクエストを受けることにした。

内容はいたって単純で、ポポを10匹倒す、というものだった。制限時間は特になく報酬も時間に応じてといったもの。所謂出来高の様なものだ。

初めてのクエスト、初めての戦闘を前に三人はなんとも言えぬ高揚を感じ街の外<ポポの草原>を目指すのだった。

五部 戦闘（前書き）

ユニーク数が1000を超えていました。

こんな拙い物を読んで頂いて感謝しております。

これからも、読んでいただけると非常にうれしいです。ついでに感想とかもあると励みになるのでよろしかったらください。酷評お待ちしておりますw

五部 戦闘

30分ほど歩いて三人は目的地ポポの草原に着いた。しかし、いざポポを目の前にして倒せないでいる。

「やっぱりかわいすぎて倒せないよ……」

はあとため息を吐きながらユリが呟く。

「たしかに気は引けますよね。」

「でも、倒さないことにはなあ。」

三人が手を出せないのは訳がある。先ほどユリが言っていたように非常に可愛く愛嬌があるためである。ポポというモンスターは女性のみならず男性にもかわいいと評判のモンスターで白い毛に全身覆われていて目は大きく丸くとても愛嬌があり、口も猫のそれを模写したような形でフワフワ浮いているという感じである。

実際に始めてポポを前にして手を出せないプレイヤーが殆どである。

「まあ、しゃーねえよ。とりあえずちやちやっとな倒しちゃおう……ぜっ!」

そう言ったと同時に腰に着けた初期装備ブロンズダガーを上から振り下ろすように斬りつけた。キュウウウウと物悲しそうに叫びながら消えていくポポを見てスフィアは何かすごくいけないことをした気分になった。

「なっ……。なんでこんなに罪悪感が……」

「ある意味拷問ですね。まさかこんなに心を打つ泣き声をするなんて。」

「うう……。私、絶対倒せないよ……。」

ユリはそのまま「後は任せた……。」と言った後草原に寝そべって空を見上げていた。その後二人もため息を吐きながらクエストでの規定数を狩った。

その後クエストが終わりセンターでの報告が終わった後ユリが「シリルの砂浜に行きたい」と言ったので三人でシリスの砂浜を目指して歩き出した。

「しかし、初戦があまりにもあっけなさ過ぎてつまらなかったな。」

「最初のモンスターだからと言って一撃ですからね。」

そんな感想を言いながら歩いて砂浜に着いた三人はとりあえず座って狩りをしている人たちを眺めてみた。

狩りをしているプレイヤーは各々好きな武器を構えているが自分たちと同じ格好をした初心者の様なプレイヤー達はとりわけ蟹の様なモンスターを狩っていた。

「みんな、蟹みたいなのを狩っていますね。」

「だな。あれなら気兼ねなく倒せそうだしな。」

「うん、私でもあれならいけるよ。」

「ちつと、攻略BBSでも見てみるかな。」

スフィアはそういうと蟹の情報を掲示板から引っ張り出してきた。

NO・109 砂浜のプロスターについて イザナミ

Re：砂浜のプロスターについて カナミ

そんなもの ビジー

Re：そんなもの カナミ

すみませんでした・・・ イザナミ

砂浜のプロスターについて イザナミ

こんにちは。砂浜のプロスターについてお聞きしたいのです。あれはレベル1でも狩れるんでしょうか？どうしてもポポは倒しにくいので・・・

それと、他に狩りやすいモンスターなんかもいたら教えていただければと思います。

Re：砂浜のプロスターについて カナミ

ご返答します。適正レベルが3〜5なので一人では正直きついでしょう。レベル1なら三人は最低ほしいところですね。

それと他に狩りやすいというところで行くと、〈幻想の森〉に居るムナジモというモンスターなら動きも遅く適正がレベル1〜3なので平気だと思いますよ。

そんなもの ビジー

自分で叩いてみる、話はそれから。甘ちゃんが。

Re：そんなもの カナミ

ビジーさん、そのような言い方はないと思います。皆最初は初心者で分らないことが多いのですから。自分の過去も振り返れないようではあまりいい大人とはいえないと思いますかね・・・

すみませんでした・・・ イザナミ

私のせいで気分を害した方がいらっしやっただけですみませんでした。

カナミ様ご親切にありがとうございます。さっそく森に行ってみたいと思います。ありがとうございます。

「なるほどね。三人なら何とかいけそうだよ。どうする？」

「それじゃ、狩ってみる？」

「ん、おっけー」

スフィアの同意が取れたところで三人は近くに居たプロスターに駆け寄る。

「なんだか、ロブスターね。」

プロスターとは通称蟹と呼ばれるモンスターで、体長約1mほどで両の鋏には棘が着いている。ロブスターを想像してもらえると分りやすいと思う。

「じゃ、いきますか。」

とスフィアが言ったと同時に三人はダガーを構える。

「とりあえず、様子見で俺が叩いてみる。」

スフィアはそういうとプロスターに向けてダガーを上から切りつけた。しかし、プロスターの殻は思ったよりも固く逆にはじき返されてしまった。

「くそ！ 硬い……」

プロスターは殴られて怒ったのかスフィアの方を見て鋏を上下に揺らしながら近づいている。スフィアはどんな攻撃がくるのかとダガーを構えたまま動かない。キュイと一瞬鳴いたかと思つた瞬間プロスターは上に飛びスフィアに向けて鋏を叩き付けた。飛ぶとは思つていなかったスフィアは防御も出来ないままに後ろへ飛ばされる。

「ぐは！」

「スフィアさん！」

「スフィア！」

クログネとユリの二人はすぐスフィアの元に駆け寄った。ダメージが大きかったらしく「うう……」とスフィアは唸っている。そんなことはお構い無しにプロスターはもう一度飛び跳ね鉄を振りかざす。しかし、一度見ていたためか予想をしたクログネがブロンズダガーでその攻撃を防御した。プロスターは防御されると一歩後ろへ跳び次の一撃を加える機会を窺っている。クログネもユリもプロスターがいつ仕掛けてくるか分らないため動かずにその動向を見守っていた。

「ちくしょう！ ぶっ殺してやる！」

起き上がりダガーを逆手に構えて走り出そうとしたスフィアをクログネが止める。

「どうするっていうんですか。殻は固いんですよ、また弾かれるのがオチです。」

そう言いながらクログネはプロスターの体の特徴を見た。たしかに殻に覆われている所は硬そうだが他の間接部分や目の辺りはどうだろうか、案外もろいんじゃないだろうか。そんな事を考え一か八かで賭けてみることにした。

「二人とも、一か八かですが間接部分や目の辺りの比較的脆そうな

部分を攻撃してみましよう。」

「ああ。」

「わかったわ。」

二人が頷いたと同時にプロスターは大きく飛び跳ね鉄を叩きつけてきた。その鉄を三人は後ろに飛ぶことで回避し着地と同時に前に跳び間接部分にダガーを突き刺した。ギイと鳴いた同時に身体を揺さぶりダガーごと三人を振りほどくと、プロスターは警戒をしながら後ろに下がっていく。

「いけそうですね。もう一度あのタイミングで突き刺しましょう。」

「それがいいな。」

三人は一度一塊になるとプロスターがもう一度飛び掛ってくるのを待った。しばらく睨み合った後プロスターは予想通りに飛び掛つて、鉄を振り下ろす。しかし、先ほどと同じ要領で間接を突き刺した。ギイイイと鳴きながプロスターは光の粒となって消えた。

「やったな。」

「ええ、倒せましたね。」

「あれ、なんだろう？」

ユリはプロスターを倒した後に浮いているカードを指差した。

「ああ、きっとアイテムカードじゃないですか？」

「カードになるって言ってたしな。」

「もらっていいかな？」

ユリの言葉に二人は頷き、それを見たユリはカードに手を伸ばした。

アイテム名 【プロスターの殻】

種別 通常アイテム・素材

説明 シリスの砂浜に居るプロスターの殻。装備品への加工などに主に使われる。

アイテムを受け取ったユリは「ありがとう」と言って二人にお辞儀をした。

「しかし、直撃受けると結構痛いな。LP100あったのに65になってるぜ……」

「こちらも、一応防御はしたんですが89になってますね。」

二人は自分のLPを確認して驚いていた。適正レベルがすこし高いくらいでここまでの力の差がでるとは思ってもいなかったからだ。

そうこうしながらとりあえず、三人は蟹を狩り続けた。

それが、あるフラグを立ててしまつとは知らずに……

五部 戦闘（後書き）

六部 銀髪の剣士

三人はあれから小一時間ほど狩りをして、全員がレベル2になった。スフィアはとりあえず攻撃力と言うことで物理攻撃に3ポイント振り分け、クロガネは魔法攻撃にユリはスピードに3ポイント振り分けた。

それから、3匹倒せば30体と節目になるまで狩ろうということ
で休み休み狩っていた。

「しっかし、3ポイント振り分けるだけじゃなんか効果が地味にしかわかんないな」

「僕は魔法使いみたいになりたかったのではやく魔法を使ってみたいですね。」

「私とはかく速く動けるようになりたいなあ」

三人は思い思いの事を口にしながら最後の1匹を倒した。

「じゃあ、丁度30匹だし一回帰るか。」

「そうですね。それに時間的にも明日に影響出そうですね、僕はそのままログアウトします。」

「うげ、もう夜の12時なんだ……」

ブックには表示された時間をみてユリは渋い顔をしていた。同じようにスフィアはも時間をみて渋い顔をした後「帰ろうか」と言っ
て歩き出そうとした。

ギョオオオオオオ!

帰ろうと草原の方に歩き出そうとした三人は後ろで急に上がった鳴き声にびっくりして振り返った。そこには先ほどのブロスター1匹分の大きさはあろうかというハサミに体長は約3mほどで殻にはハサミ同様に棘がついているブロスターが此方をにらみつけていた。

<キングブロスター>シリルの砂浜に出る条件型ボスモンスター。出現条件は1時間半以内に30匹以上のブロスターを撃破。基本的にはブロスターと攻撃方法が同じだが時間がたつにつれてブロスターを呼び寄せる。適正レベルは40〜45。

「で、でけえ……」

スファイア達三人が驚愕していると周りから「ボスモンスターだ!」「誰か倒せるやついるのかよ……」など驚愕や恐怖の叫び声が上がっている。

無論砂浜に来るプレイヤーで倒せる者など居ない。そもそもユグドラシル内でのTOP層のレベルでも50前後でそれらの人の殆どは新規ダンジョン開拓などで砂浜などには来ない。

グルルと呻りながら標的のスファイア達にキングブロスターは近づいていく。その威圧から三人は逃れられずに竦み上がっていた。それを見たキングブロスターは好機と見るやその巨体からは想像できないようなスピードでハサミで顔を覆いスファイア達に向かって突進しはじめた。

(しまった……！)

スフィアはその瞬間咄嗟にダガーで防御姿勢を取り眼を瞑った。ガキーン！と大きな音と共に自分が吹き飛ばされると思っていたスフィアだが一向に宙に舞う感覚が来ない。恐る恐る眼を開けてみると目の前には、銀髪の長髪で190cmはあるうかと言う長身、だが細身でいわゆるモデルの様な体系の男がキングブロスターと自分達の間立っていた。

その男は片手に持った細身の刀の様な武器でキングブロスターの攻撃を止めている。2、3秒睨み合っていたかと思うと男は武器を急に引いた。それが予想外だったのかキングブロスターは勢いあまつて少し前のめりのようによろめいた。その隙を逃さず男は中段の横蹴りを放ち蹴り飛ばした。

(すげえ、あの巨体を軽々と蹴り飛ばした……)

そんなことをスフィアが思っている間にキングブロスターは体制を立て直し銀髪の男を睨んでいる。男は姿勢を低くしたかと思うと一気に走り出し距離を詰める。男の予想外の速さに対応が遅れるキングブロスターは一息遅いタイミングでハサミを横殴りに叩きつけようと振り回す。しかし、男の方が先に相手の懐に入っていたためハサミは何もない所を空振りする。その瞬間キングブロスターの下に潜り込んでいた男が一瞬光ったかと思うとキングブロスターは胴体を真っ二つに裂かれ光の粒となって消えていった。

その消えいく瞬間に特に何の感慨も無いのか武器を腰の鞘に収めるとアイテムカードを回収して男は光の中へと消えていった。

「クロガネ見た……？」

「ええ、ありえないくらい強そうな人ですね。」

「カツコイイ……」

三人はしばらくその場に呆けて居た。周りでは別のプレイヤー達が突如現れた銀髪の剣士が何者かとうわさしていた。

その後三人はミッドガルドに帰り回収したアイテムを換金し、また会うことを約束しホームポイントでログアウトした。

六部 銀髪の剣士（後書き）

とりあえず、これで1章は終わりです。
所々おかしな点がありましたら教えていただけるとうれしく思います。

ホームポイント：各街にあるログアウトとログインをする場所。死亡時にはここに戻される。別途アイテムで街に売っている簡易型ホームポイントを作れるものもある。ただし、簡易型の場合は死亡時に戻されるという機能はない。

1部文の修正と脱字の修正。

第二章（前書き）

第二章

白い光の中からスフィアが出てくる。場所はミッドガルドのホームポイント。

スフィアは街の広場にあるベンチに座っているクロガネを見つけると大きく手を振りながら声をかけた。

「おーい！ クロガネー」

クロガネは軽く手を振ると立ち上がりスフィアのもとに近づいた。軽く挨拶を交わし、ふと見るとユリが居ないことにスフィアは気づいた。

「ユリはまだログインしてないの？」

「いや、ユリさんは装備を整えるとかって武器屋と防具屋を見回らって言っていましたよ？」

「そっか。じゃあ、俺達も合流する？」

「そうですね、いきますか。」

二人は広場から歩き出すと商店街のある場所を目指した。

ユリがどちらの店に居るのか分らない二人は剣が斜めに交差した看板のあるいかにも武器屋という店に足を運んだ。

店の中は、壁に様々な剣やダガーのようなものが飾ってあり槍や杖のようなものも立てかけてあり、カウンターはショーケースのようになっている。他の小物等が飾ってあった。いかにも武器屋です！と主張しているような内装だった。

その中に見覚えのあるエメラルドグリーンの髪をした後姿をカウンターに見つけた二人は声をかけた。

「ユリいい武器はあったかい？」

と、声をかけたスフィアに軽く挨拶をするとまたカウンターに目を向けてしまった。

ユリはショーケースの中の武器を見ているらしく、顔を左右に振って物を確認してはうんうん呻っていた。

「ねえ、二人ともどっちの装備がいいかしら？」

そう言うとユリは二人においておいてをしてショーケースを指差した。

ユリが指差した二つの装備は両方とも攻撃型グローブのようで片方は皮製のシンプルな指貫グローブ、もう片方は鉄製の少し重そうなグローブというより籠手に近いものだった。

「何が違うんだ？」

「こっちのレザーグローブはスピードが2上がるけど攻撃力1しか上がらなくてスキルは縦横無尽とかいう使ってみないと分らないやつ。アイアングローブはスピードが2下がって攻撃と防御が2ずつ上がってスキルは粉碎でなんか強そう。まよっちゃうわー」

「と、言いますかユリはグローブを使うんですね。」

「え？うん、以外だった？」

「少し。ただ、最初からグローブも敷居が高そうなイメージがあり

ますけどね。」

「いーのいーの。なんか速さを求めるとグローブのが良さそうじゃん？」

クログネとの問答しながらもユリはどちらにしようか悩んでいる。

「ユリ、決まりそうにないから俺達も武器を探してみようか。」

スフィアはそういうとさっさと自分も武器を探し始める。クログネもそれを見て杖の有る方へと歩き出した。

ユグドラシル内では店に売っているものは全品展示しており、実際の物を見て装備して自分に合うかを確認することが出来る。

一頻り中を見て回ったスフィアは<ブロードソード>という一般的な片手剣を買うことにした。値段も手ごろで初心者にも扱いやすいという文言に引かれたためである。クログネは木の杖に丸いコブシくらいの赤い宝石がついた<ファイアロッド>を購入していた。ユリは結局防具も買わなくてはいけないということで<レザーグローブ>を買って三人は武器屋を後にした。

その後となりにある盾の看板の防具屋に入った。中の広さは武器屋と同じくらいで違いといえば盾や服、ブーツ等が飾ってありカウンターにはイヤリング等の装飾物が飾ってあった。

生憎三人の持ち金では<レザーメイル>しか買えず、そのほかの装備を試着して遊ぶくらいで時間もかからずに買い物を終えた。

三人は新調した装備を身につけると、次はどこにいきこうか話し合っていた。

「とりあえず、狩りに行って暫くレベルあげる?」

「クエストを請け負って資金調達をするのもいいですね。」

「その前にご飯食べない?」

ユリが言った一言に二人は笑うと「じゃあ、どこかさがしましょう」と言ってマップを見た。

周囲には青や緑、赤の点が着いていてマップの端に説明が書かれていた。赤はNPC、青は入り口ポータル、緑はプレイヤーと言った具合だ。入り口ポータルの横には小さく看板のマークが着いていてそれについても説明書きがあったが、とりあえずレストランは魚の看板ということで周囲の魚の看板の店をマップで探す。

「ああ、ありました。ここからだ道の向かい側の一番城側の店ですね。」

「んじゃ、行ってみますか。」

三人は道を渡って向かい側に来ると城の方に歩き出す。

程なくして魚の看板の店を見つけて中に入った。中はファミリーレストランのように入り口近くにカウンターがありその奥に4人ほどが座れるテーブルが10席ほどあった。まだ、混雑の時間ではないようで人はあまりいない。

NPCに席を案内され、テーブルの上にあったメニューを取りどれにしようかと三人は選び出す。

「結構メニューがあるな。和洋中華なんでもござれて感じだな。」

「ここまでメニューがあると迷ってしまいますが、所持金的には定

食がいいかもですね……」

「たしかに……」

いろいろなメニューのある所持金を考慮して三人はさばの味噌煮定食を頼んだ。少し時間を置いて運ばれてくると思っていた三人だが一瞬で目の前に現れた料理をみると、さすがゲームと思った。

「「「いただきます！」「」」

三人は声を合わせて言い、料理を口に運んでそのおいしさについて笑みを零す。

「うめえ」

「確かに、美味しいですね。」

「ゲームとは思えない……」

料理を食べながら三人は次に何をするかを話し合い、結果蟹以外のモンスターを狩りに行ってみようということになった。

一足早く食べ終わったスフィアは掲示板を開き適正狩場を検索した。

NO・145 ゴ布林街道 ガイダル

Re:ゴ布林街道 カナミ

ありがとうございました ガイダル

ゴブリン街道 ガイダル

現在、レベル3が3名居ます。プロスターではそろそろ旨がなくなってきたので他の狩場に移ろうと草原奥のゴブリン街道を模索しております。レベル3、3名で可能な狩場なのでしょうか？また、ボスマンスター等の情報もいただけるとうれしいです。

Re：ゴブリン街道 カナミ

ご返答します。レベル3が3名ならば問題なく狩れます。ただし、沸きがかなりあるので回復ポーション等の所持をお勧めします。ボスマンスターについては未確認ですが、居ないと言い切れないと思います。

ありがとうございました ガイダル

ありがとうございました。行ってみたいと思います。

スフィアが記事を見終わるとほぼ同時に二人の食事は済んでいた。

「このゴブリン街道って行って見ないか？」

「いいんじゃない？ 私はさんせー」

「じゃあ、僕も賛成なんでポーションを買ってそこに行きましようか。」

ゴブリン街道に行くこと決まった三人は道具屋に立ち寄り回復のポーションを買って、草原の奥へと進んでいった。

第二章（後書き）

第二章、こんな感じでスタートですが、分りにくい等ありましたら
ご意見下さい。評価もいただけると励みになるのでよろしくお願
いします！

一部 vs ゴブリン

三人はミッドガルドを出るとゴブリン街道を目指した。

ポポの草原の奥にあるゴブリン街道はユーザー間の呼び名で正式名称は<エリル街道>と言い、エリルの街への交通手段として使われる。街道ではモンスターも出現し、その出現するモンスターの殆どがゴブリンであるため通称ゴブリン街道と呼ばれている。

「ん、ポポの平原を抜けた街道って言うところかな？」

スフィアは周りを見渡しそこ以外にはそれらしいものが無いのを確認する。

目の前には砂利道が続き両脇には申し訳程度に生えた雑草、その向こうには森が広がっている。

とりあえず、モンスターの姿が確認できないということで三人は街道を歩くことにした。

しばらく歩くと目の前に看板があり「この先モンスター発生、注意せよ。尚エリルの街まで残り10Km」と書かれた看板が出てきた。

「この先からモンスターが出るのか。っていうことは、ここがやっぱりゴブリン街道だな。」

「そうみたいですね。注意していきましょうか。」

「もし、余裕がありそうならエリルの街にも行ってみようか？」

「さんせー。やっぱりいろいろ歩きたいしねー！」

一様に頷くと歩き出した。

三人が歩き出して20mくらいすると、両脇の森からガサガサと音がして3匹のそれが現れた。

「案外、リアルに見ると引くな……」

スフィアはそれを見るとすこし後ずさりした。

<ゴブリン>身長1mほどで皮膚は緑色。両肩には角が生えており、身体には腰に麻で出来たズボンを穿いているのが一般的。武器は棍棒や刃毀れのした剣やダガーなど様々。ゴブリンの種類は数種類が確認されており、その殆どは簡単な言葉がしゃべれる。基本的に3匹以上で行動している。統率力があり連携プレーは中々の物。適正レベルは2〜6。

ゴブリンを確認した三人は各々の武器を構える。それに合わせるかのようにゴブリン達も自分達の持っている武器を構えジリジリと三人に近寄る。

「各個撃破で行くか？」

「丁度3匹ですしそうしますか。」

「じゃあ、それぞれ正面にいるやつを相手にするって事で！」

そう言うとユリは自分の目の前にいる棍棒を持ったゴブリンに向

かって走り出した。その動きを確認したゴブリンは自分達も各個撃破をするかのようにそれぞれ目の前の敵に走り出す。

ユリは走りながら相手の分析をしていた。身長が低く（ゴブリンでは普通なのだが）上半身は身を守るための装備をしていない。手には棍棒があるだけ。

そのことを確認すると一気に姿勢を落とし相手の懐に入り込んだ。ユリは懐に入って2、3発腹部へ正拳突きを叩き込んだ。しかし、ゴブリンにはあまり効いてないのか棍棒を持っていない左手でユリの腹部にボディーブローを見舞う。その予想外の痛みで顔をしかめながらユリは距離を取った。

「まさか、素手でも攻撃するなんて……」

ユリは棍棒でのみ攻撃してくるだろうと相手との距離を詰めたのだが、まさか相手が素手で殴ってくるとは思わなかったため焦っていた。ゴブリンの方は距離が開いたため棍棒での攻撃も出来ると言わんばかりにそれを挑発するよう上下に揺らしている。

クログネは正面に走ってくる斧を持ったゴブリンに対して魔法を放とうとしていた。道すがら予習をしていたのだがうまくいか不安があったが、やるしかないと決め正面にロッドを持って地面に垂直に立てるようにして構え魔法を発動した。

「ファイアボール！」

クログネの放った火球は斧を振り下ろそうとしたゴブリンに間一髪所で当たった。しかし、威力が弱いのかゴブリンはすこしよるめいただけでそれほどダメージが無い。すぐに体制を取り戻したゴブリンはもう一度斧を構え振り下ろす。クログネはそれをバックステップをして避ける。距離が開いたところで次にどうすればいいか考えていた。

ロッドでの直接ダメージは期待できない、かと言って魔法もたいしたダメージを与えられない。ダガーに持ち替えての攻撃をしようと思うもダガーの攻撃範囲まで入り込むスピードも無い。正直手詰まり状態だった。

スフィアはブロードソードを正面に構え相手を見据えていた。ゴブリンも構えたスフィアを見て走るのをやめ槍を正面に突き出す格好で構えていた。

(リーチが違う。踏み込みの一発で槍を弾いて斬り返すか。)

スフィアは考えを行動に変えるべくソードを左に据える形で構えそのまま走り出した。自分の間合いに入ったと思ったゴブリンはスフィアに対して槍を突き出す。その槍を、思ったとおりと思いがらソードを斜め上へ斬り上げ槍を弾いた。と、思われたが槍は少し上に軌道がずれただけでスフィアの頬を掠る。スフィアはそのゴブリンの腕力に驚きながらも剣が押し返される反動で横に移動した。ゴブリンはもう一度槍を構えた。スフィアも正面に構えると次をどうするか考えていた。

一部 vs エブリン(後書き)

戦闘描写苦手です・・・

もっとうまく表現できればー > <

二部 vs ゴブリンTake 2

スフィアは正面に構えたまま他の二人を見た。やはり二人も苦戦しているらしく焦りの色を隠せない。対するゴブリンは3匹共が余裕を見せていた。

(どうしたらいいんだ……)

動かないスフィアにゴブリンは痺れを切らしたのか突撃した。正面からの単純なものだがスピードもパワーも劣るスフィアにとつては十分脅威だった。スフィアはゴブリンの突撃をソードの腹で受け流すとそのまま横を通るゴブリンを袈裟斬りした。ゴブリンは斬られた反動でよろめいたが体制を立て直すとすぐに突撃の構えに戻る。

(まさかこいつ、正面に走るか突くことしか出来ないんじゃないか?)

そう考えているとゴブリンが2回目の突撃をしてきた。それを先ほどと同じように受け流すともう一度袈裟斬りにする。ダメージの蓄積はあるのか先ほどよりも大ききよろめいてそのまま転んだ。ゴブリンはよろよろと立ち上がるとまた、突撃の構えをとる。

(やっぱり、俺の考えであってたのか。)

それを確信するとゴブリンが突撃するのを待った。ゴブリンは2度失敗しているにも関わらずスフィアに対して突撃をする。その動きは初めよりも切れがなくよけるのは容易かった。そして同じように横から斬るとゴブリンは光の粒となって消えていった。

スフィアは素早くカードを回収すると他の二人の下へ駆けていっ

た。

クロガネは斧での攻撃をギリギリでかわしながら魔法を撃つ事を繰り返していた。しかし、ゴブリンは斧の振り下ろしにも関わらずそれなりのスピードで来るため避けられるずに2度直撃を食らっていた。

(あと、1発貰ったら終わりですね……)

合計2発の斬撃を食らっていたクロガネのLPはあと1発耐えられないほどまで落ちていた。ゴブリンの方もそれを分っているのか今までもよりも慎重に攻撃しているように見える。

(しかし、ファイアーボールを後何発入れれば倒れるのか……)

クロガネはゴブリンに対して計5発ほどの魔法を当てていた。ゴブリンの動きは最初に比べて遅くなり確実にダメージが蓄積されているのが分るのだが後何発入れればいいか、というのが全く予測できないでした。

(あと5発は必要なのか、それ以上か……)

そういくつか考えを巡らせていた時にゴブリンが動き出した。クロガネは一瞬それに対しての反応が遅れ「しまった！」と直撃を覚悟し目を瞑った。しかし、斧の刃はクロガネを裂くことなく止まっている。ゆっくりと目を開けるとそこにはスフィアが立っていた。

「よお、遅くなっちゃった。」

前を見たままそういつとスフィアは、ゴブリンを正面から蹴り距離を取った。

「ははは、先を越されてしまいましたね」

「あとで飯でも奢ってくれ。」

そう冗談を言うとスフィアはソードを下段に構えゴブリンに走り出した。クロガネもゴブリンの横に移動するように動いた。スフィアが走ってくるのを確認するとゴブリンは斧を振り上げスフィアに向かつて振り下ろした。スフィアはその斧の軌道を見て左に避け下段からの斬り上げを放った。その斬り上げでよろめいたところへ横へ移動していたクロガネが魔法を放つ。それが命中するとゴブリンは光の粒子へとなり消えた。

「助かりました。たぶん来てくれなかったら死んでました……」

「いやいや、いいんだって。友達だろ。それよりも早くユリを助けよう。」

はい、と力強く頷いたクロガネはアイテムカードを回収するとすぐさまユリの元へ駆けつけた。

ユリは苛立っていた。正直簡単に倒せると思った相手に挑発までされ馬鹿にされているのだから。

(ちえ、絶対倒してやるんだから！)

そう思いながらも必殺の考えが浮かばないままずっと対峙していた。拳に力を入れたり抜いたりしてユリはあることに気づいた。

(そういえば、スキル使ってなかったな)

ゴブリンもこちらの動きをみているで棍棒を上下に揺らしながらも動きは見せない。今しかないと思いユリはスキルを発動した。

「縦横無尽！」

ユリがスキルの名前を叫ぶと髪の毛がすこし浮いたかと思うと足元の砂利が少しだけ時計回りに動いた。しかし、別段なにが変わったのか分らず考えていた。

そんなユリを見て焦ったのがゴブリンは急に走り出し棍棒を振り下ろしてきた。ユリは一瞬その動きに遅れたものの紙一重で避け、バックステップで距離を取った。そして気づく。

(さっきより速くなって……！)

そう、ユリの動きは先ほどより速くなっていた。しかし、どれほど速くなったか分らないユリは一度相手の懐に入り込んでみようと思い駆け出した。その様子を見ていたゴブリンだがユリの予想外の速さに固まってしまう。ユリはその隙を逃さないように懐に入り込むと相手の腹を2発殴る。攻撃されたことでゴブリンは我を戻すと左の拳でユリを殴りつけようとするが、それは空振りに終わる。

スピードの速くなったユリは2度目になるその攻撃を右へサイドステップすることにより避けていた。攻撃を避けたユリはゴブリンの肩にある角を持ちそのまま足払いをすると仰向けに転ばせた。そ

の上に馬乗りに乗るとゴブリンの顔を何度も打ち付けた。そして、6発程度殴ったところでゴブリンは光となって消えた。

アイテムカードを取り終えたところに丁度二人が来た。

「すごかったですね。最後の動き、かなり速くなってましたね。」

「うん、縦横無尽使ったの。スピードを上げる補助スキルだったみたい。」

「そうなのか。じゃあ、この後も役に立ちそうだな。」

三人はそれぞれの戦いぶりを話すとこの先どうしようかという話になった。

「正直僕は、プロスターやクエストでレベルを上げてからもう一度挑んだ方がいいと思います。」

「確かにそうよね。かなり苦戦しちゃったし……」

「この先もつと強いやつが居るかもしれないしな。それにもう夜の11時近い。街に戻るころには丁度ログアウトの時間だろ。」

「では、一度戻って明日にでもどうするか決めましょう。」

そうしよう、と二人が賛成すると三人はミッドガルドへと戻った。ホームポイントでまた明日と言うとそれぞれログアウトしていった。

三部 ギルド勧誘

翌日ログインした三人はセンターへクエストを受けに行った。しかし、特に割りにいいクエストも無かったのでどうしようか考えていた。

「俺達の出来そうなものでもしるそうなのってないな……」

「選り好みをしなければいいんじゃないですか？」

「でもどうせなら……」

などと三人で稼ぎがよく面白く短時間で出来るという都合のいいクエストを探していた。

そんな三人を遠目からずっと見ているプレイヤーがいた。

（あの子達まだレベル2なんだ。はじめたばかりみたいだし。うちのギルドにでも招待してみようかしら……）

そのプレイヤーはうんうんと考えている三人近づき声をかけることにした。

「やっほー。元気してた？」

スフィア達はいきなり声をかけられ驚くとその人のほうを見た。赤いセミロングの髪に整った顔立ち、透き通った声。スフィアはどこかで見たことあると考えていると向こうが不満そうな声で頬を膨らましながら言った。

「あー、覚えてないでしょう！ 最初に道案内してあげただけだなー？」

そういわれてスファイア達は、はっと顔を上げるとシリルの砂浜で道を聞いた女性だということに気づいた。

「あ、あの時の！ 気づかないですいません。あの時はありがとうございました。」

スファイアが、すいませんと頭を下げると「まあまあいいのよ」と手をひらひらさせて怒ってないと言った。スファイア達が一通り挨拶と自己紹介を終えると女の人も自分の自己紹介を始めた。

「私は、ミベラ。短剣使いでレベルは42。ギルド『Flame Beasts』のサブをやってます。」

スファイア達は驚いた。まさか自分達が最初に話しかけたのがトップ層の人間だとは思わなかったからだ。そして、ミベラの次の言葉に更に驚くことになる。

「いやいや、そんなに驚かないで頂戴よ。それよりもさ、うちのギルドにはいない？」

いきなりのギルドの誘いにスファイア達はどうしようかと少し悩んだ。自分達でのギルドの立ち上げも考えているスファイア達にとっては入ってギルドのシステム面を学ぶかそれとも1から自分達ですべてをやるか。

10分ほど考えたスファイア達はミベラに答えを出した。

「よろしくおねがいします。ただし、条件があるんですが……」

OKの返事を貰い晴れやかな笑顔を見せたミベラだが『条件』が出て来たことで一瞬顔を強張らせる。

「僕達も将来ギルドを作ろうと思っていました、その時には脱退したいのですがよろしいですか？」

スファイアがそういうと、なあ〜んだといった感じの態度になり承諾をした。そしてそのまま三人をギルド入隊の受付に連れて行き入隊の手続きを済ました。

そして、簡単にギルドの内容とシステムを紹介し始めた。

<ギルド>2人以上からなるギルドマスターを中心としたもの。最大登録人数に上限は無い。ギルドではギルド内特別チャットルームと呼ばれるものが使用可能となる。ギルドに入るとブック内にもギルドコマンドが追加されチャットやメンバーのログイン状況が見られるようになる。ギルドチャットは誰かが発言すると視界の右端にメールのマークが表示される。他にギルド単位での専用クエストやギルドルームと呼ばれるギルド専用の家も与えられる。ギルドルームは資金を投入することにより内装を変えたり部屋自体を大きくすることが可能。

と、一通りの説明を終えて一息つくときさっそくチャットで紹介を始めた。

ミベラ「やつほー、みんないるー？」

ガイン「ああん？ どうしたんだミベラ。うつせーな」

ミベラ「ひっどーい！ 新人が入団したのよ！」

メイティシユ「へえ？ めずらしいですね。それよりも居るかどうかをチャットで確認しなくてもメンバー表をみればいいじゃないですか。」

ミベラ「えー、そんな事いわなくていいじゃーん。それより今からじこしょーかい！」

スフィア「スフィアです、よろしくおねがいます。レベルは2で今はソードを使っています。」

クロガネ「クロガネと申します。魔法使いを目指すレベル2の若輩者ですがよろしくおねがいます。」

ユリ「ユリです。格闘戦を極めたいと思っています！ 二人と同じレベル2ですがよろしくおねがいます！」

スフィア達が自己紹介を終わらせると暫く質問攻めにあつた。その後、他のメンバーはギルドルームに居るということでアジトへ向かうことになった。

「ミベラさん、ギルドルームってミッドガルドにあるんですか？」

スフィアが場所を確認するように聞いた。

「うちはねー、エリルにあるんだよー。ギルドルームっていうのは各ギルド好きなどころを指定できるからね。」

そうなのかと思いつながらあることを思い出した。エリルに行くには街道を抜けなければ行けない筈だった。また、ゴブリン共と戦うのかと思つたがそれよりもエリル近辺のレベルのモンスターをスフ

「イア達が倒せるのかと言う疑問も湧いた。

「ギルドルームに行くのはいいんですが、ゴブリン街道じゃ足手まといになるのと何より向こうについて適正レベルのモンスターって居るんですか？」

クログガネは三人が思っている事をミベラに質問した。

「だーいじょうぶ。ゴブリン程度なら私なら余裕だし、地上界と呼ばれる、ここの街の周りには基本的に弱い敵しか居ないから。」

なるほどと三人は納得し、「早く行かないと遅くなるから」とミベラに促されミッドガルドを後にした。

四部 Queen bee

程なくして4人は街道へ着いた。4人が雑談をしながら歩いていると両脇の森からゴブリンが5匹現れた。1匹は斧、1匹はソード、残りは棍棒を持っていた。

「5匹居ますけど、各個撃破でいきますか？」

クロガネはミベラに質問した。数では向こうの方が上だし、何より足手まといでは終わりたくなかったのでそう言った。

「大丈夫。私を誰だと思ってるの？ ミベラ様よ？」

そういつと後ろ手で3人に下がるように指示すると両手にダガーを構えた。左手にはジャンビィヤと呼ばれる刃が歪曲したダガーを逆手に、右手にはステイレットのような刺すのを専門としたようなダガーを順手に持っている。

「で、でも一応は役に立ちいかなあと思ってるんですけど？」

スフィアが食い下がると「一瞬だから」と言ってそのままミベラは走り出した。

まず、一番近くにいた棍棒を持ったゴブリンに向かった。その速さはスフィア達では目で追うのが精一杯だった。ミベラは、まずゴブリンの後ろに回るために横を通り抜けた。ミベラはその間に首にジャンビィヤで一度斬り付けた。さらに後ろに回ると背中をステイレットで刺した。その瞬間ゴブリンは光の粒子となって消えた。その間約5秒。

スファイア達は啞然とその光景を見ていると残りのゴブリンが一斉にミベラへ攻撃を開始した。ミベラはすでにゴブリン達に構えを取っている。

最初に斧で仕掛けてきたゴブリンの攻撃をミベラは右に逃げるとその勢いのまま背中に戻り込みステレットを突き刺した。止めの一撃を加えようとしたところから後ろからソードで斬り付けようとするゴブリン。それを斧のゴブリンの攻撃を避けた時点でソードをもったゴブリンが近づいているの見ていたミベラはそれを見ないまま左へのサイドステップで避けると左足を軸にした回し蹴りで蹴り飛ばした。蹴られたゴブリンは3mほど吹っ飛びのた打ち回っている。ミベラはすかさず斧のゴブリンへ近づくと正面からジャンプで斬り付ける。ゴブリンはその一撃で光となって消える。

棍棒を持った2匹のゴブリンはソードを持ったゴブリンを守るようにその前に構える。しかし、ミベラはそんなことお構い無しに走り出すと、右手に居たゴブリンを正面から蹴り飛ばすと次に左手に居たゴブリンの懐へ入り込む。ミベラのあまりの速さに対応が追いつかないゴブリン。懐に入ったミベラは正面から首への斬り付けと腹にステレットを刺した。ステレットが刺さるとゴブリンは光になって消える。そしてミベラはやっと立ち上がりソードを構えるゴブリンへ詰め寄った。ゴブリンは必死にソードを振り下ろすも間に合わず、斬戟を避けたミベラは横から斬り付けた。そのゴブリンが光へなる前にミベラは残りの1匹へと走り出していた。最後の1匹は力なく立ち上がったところでミベラへステレットを刺されて光へを変わった。

「っ、強い……」

3人は素直な感想を漏らした。それを聞いたミベラは前髪をかき上げながら、

「ま、伊達に『Queen bee』とは言われてないわよ。」

と誇らしげな顔で3人を見た。

五部 二つ名(前書き)

ユニークが3000を超えました。ありがとうございます。稚拙な文ではありますがこれからも読んでいただけると嬉しく思います。

五部 二つ名

「Queen bee?」

頭に?を浮かべて何のことだと思っっているスフィアにミベラは答えた。

「所謂、二つ名ってやつね。」

<二つ名>対モンスターやPVP、GVGなどでの人とは一線違う戦い方や驚異的な強さを誇るプレイヤーが持つ通常IDとは違った呼び名。特に運営がこのようなシステムを用いてるのではなくプレイヤー間で勝手に呼ばれていることが多い。

なるほど、と納得した三人は改めてミベラの強さを確認した。いくら自分のLvよりも弱いモンスターだからといって立ち回りが可也手馴れているように見えたからだ。

「まあ、二つ名で呼ばれるほど強くないんだけど……」

謙遜するミベラを見て、そんなことは無いと口を揃えて言った。それから4人は二つ名の話をしながらエリルを目指した。

「二つ名っていうのは誰が付けるんですか?」

スフィアはかなり気になるのか目を輝かせて質問している。

「ん、基本的に誰がってことはなくて何時の間にか付けられるんだよ。」

「なるほど。じゃあ、ミベラさんの二つ名はなんで『Queen bee』なんですか？」

「んとね、本来は私が使う武器はこのステイレット系2本で、それをさっきみたいに刺したりして倒してたらそう呼ばれるようになった。」

そういつと右手には燃える様な赤いステイレットを左手には鮮やかな青いステイレットを取り出してクルクル回した。

「綺麗な色ですね。」

ユリはそういつと2本の武器に見入っていた。

「でしょ？ これはお気に入りなのよねえ。」

ミベラはにこにここと笑いながら上機嫌にステイレットを回している。

「そついえば、二つ名を持ってる人は他にどれくらい居るんですか？」

クロガネがスフィアをどけて質問した。

「そつねえ……。ざっと20人くらいじゃない？」

サラッと答えるミベラにスフィアは驚きの声を上げた。

「やっぱり強いじゃないですか……。じゃあ、『Flame B east』のマスターさんもやっぱり二つ名を持ってるんですか？」

「一応あるわね。うちのマスターの二つ名は『緑眼の参謀』。その戦略は一級品で誰にも真似出来ないってところから来てるらしいの。」

ギルド内に2人が二つ名持ち。これは可也強い部類じゃないかと思えばスフィアは息を飲み、さらに質問をした。

「今統治しているギルド『最期の聖戦』のメンバー5人は全員二つ名持ちですか？」

「とーぜんよ。あれは別格。」

そう言いながらミベラは『最期の聖戦』について話し始めた。

「まず、マスターのカムイは双剣使いで二つ名は『九頭竜』。サブのコロン、攻撃魔法系メインで二つ名は『絶対的な支配者』。メテイスはグローブ使いで二つ名は『阿修羅』。サラは弓系メインで二つ名は『嵐』。最後にチエシヤは回復魔法系メインで二つ名は『墮天使』」

次々と拳がっていく名前にスフィアはどれくらい強いのか想像がつかない。どれくらい別格なのか気になったスフィアはミベラに聞いた。

「どれくらい強さが違うんですか？」

「平均レベルが70前後。さらにPSが桁違い。これは対峙して
ないと分らないけどね。あとは装備が全部一品物なの。」

スフィアは『一品物』の意味が分らなく、ソレについても質問を
した。

「一品物っていうのは製造スキルでしか作れない装備のことよ。」

<製造スキル>レベル20から取得可能スキル。他のスキルと違
い熟練度は50まである。モンスタードロップする素材を使って武
器や防具などを製造するスキルで、熟練度が高ければ高いほど成功
率が高く、より良いものが作れるようになる。そして稀に『一品物』
と呼ばれる世界に一つだけの武器が出来上がることがあり、この『
一品物』は成功率は極少だが性能はぴか一。

「なるほど。それは強いわけですね……」

スフィアが落胆したようにうなだれた。

「まあ、でも絶対の強さって訳じゃないしそのうち活路が見出せる
わよ。」

そういいながら、暫く話をしながら歩いていると目の前に石で出
来た高い堀と大きな門それを囲むように堀がある街が見えてきた。
門の上にはアーチ上に『エリルの街』と書かれている。門の前も堀
になっているが必要に応じて橋が掛かるようになっていた仕組みの
ようだ。

「さ、エリルに着いたわよ。」

ミベラがそう言うと同時に橋が降りてきた。4人は橋が完全に降りきったのを確認するとそれを渡りエリルの街へと入っていった。

五部 二つ名(後書き)

これにて2章終わりです。この後はエリルに入る前にすこし閑話を挟みたいと思います。

ご意見ご感想いただけると嬉しいです。よろしくお願いします。

とある部屋にて

一人の銀髪の男が光の中から現れる。

男が現れたのは一つのテーブルとそれを囲むように椅子がある部屋。ほかの物は特に無く殺伐としていた。

その椅子に一人の女が座っている。その女性は男を見ると駆け寄り、ねぎらいの言葉をかけていた。しかし、男はそんな言葉を聞いていないのか何も言わずに椅子へ座る。その動作はいつもの事なのか女も別段気にした風も無く男の隣へ座る。

男は腰に下げた刀のような武器をテーブルの上に置くとその武器の評価を女性に対して言っていた。女は評価を聞きながら改善点を男と議論していた。

一通り議論が終わると女は男に対して次に製作する武器と防具の材料を事細かに伝えていた。

男はそれを一頻り聞くとテーブルの上に置いた武器をも追う一度腰に着け光の中へと消えていった。

それを見届けた女は部屋の奥へと消えた。

しばらくすると、今度は別の男が部屋の中へと入ってきた。部屋の中へは誰も居なくそれを確認した男は奥へと行き女を呼んだ。女は言われるがままに部屋の椅子へと腰掛けると先ほどのようにねぎらいの言葉をかける。男はそれをありがとう、と言うと自身も椅子へ腰掛け杖のようなものをテーブルに置いた。

さきほどと同じように女は評価を受けその改善点を議論し男に材料の採集を頼むと部屋の奥へと消えていった。男もそれを見届けたあと、杖を手に取り光の中へと身を投じた。

その後もその部屋では同じようなやりとりが別の者達で行われていた。

とある部屋にて（後書き）

次から3章に入ります。
よろしく願います。

第三章（前書き）

すいません、連休前と連休中に個人的な理由で更新することができませんでした。

今日からまた更新していきたいと思いますのでよろしくお願いします。

第三章

<工業都市エリル>

ユグドラシル内の随一の工業都市。初心者の装備／＼玄人向けの装備までその装備の数はおよそ100に近いといわれるほどの豊富さ。装備のほかに素材の販売や周辺には素材を多く入手できるダンジョン等があるため製造スキルの向上を目指すものはエリルを拠点に置く事が多い。

「ミッドガルドとは随分と違いますね。」

4人の目の前に広がっている街並みは、赤い煉瓦で出来た1階建て、高くても2階建ての家や店が殆どで目立って大きい建物はセクターくらいなものだった。

「そうね、エリルはその殆どが工房だから上に伸ばすよりも下に住居は伸びてるわね。」

「じゃあ、ルームにもやっぱり工房があるんですか？」

「大正解！うちのホームにも工房はあるわよ。」

そんな話をしながら4人はホームを目指して歩いていた。途中『おにぎり』と書かれた看板の弁当屋で軽く食事を摂った。

しばらく歩くと街の中心ホームポイントがある円形の広場に出た。そこでは人だかりが出来ていて何かイベントでもやっているような雰囲気醸し出していた。

「あれ、なんですかね？」

興味深げにクロガネが質問をした。

「きつとPVPでもやってるんじゃないかな？ 結構武器の性能を見たりするのにやる人が多いのよ。」

PVPと聞き興味をそそられたスフィアはミベラの方をチラチラと見ている。

「見たい？ じゃあ、少し見ていきましょつか。」

待つてましたとばかりに歩き出すスフィア。その後を追って3人が歩き出した。

広場の中央では4人の男女が2対2で対峙していた。

一人は真っ赤に燃えるような髪をした黒い瞳の少年。その少年とペアを組んでいるであろう銀色の長髪に赤い眼の少年。その二人に対峙するように立っているのはどちらも蒼い短髪の髪に蒼い眼をした少女だった。少女二人は双子かと思えるほどそっくりだった。違いたといえ髪を右側に縛っているか左側に縛っているかの違いだけだ。

赤い髪の少年は片手にフランベルクのような剣を片手には長方形の四角い盾に日本風の鎧を身に纏っていた。銀髪の少年は白いローブに赤青緑がグルグルと回る宝玉が付いた杖を持っている。

対する少女ペアは、右縛りの子は両手に指貫グローブを着け全身は肩や肘など主に間接部分と胴回りを守る程度の簡素な鎧。左縛りの子は両手で140cmほどのトンカチを大きくした様なハンマー

を持ち鎧は右縛りの子と同じものを着ていた。

スフィア達が人ごみを掻き分け見やすい位置に付いたときに勝負は始まった。

まず、赤い髪の少年は剣を横に据えると動きが遅いであろう左縛りの少女に駆ける。それを阻止しようとする右縛りの少女が間に割って入ろうとするも銀髪の少年が放つてであろう拳大の火球に行く手を遮られた。

ちっ、と舌打ちをすると右縛りの少女は左縛りの少女に、まかせたと言うと銀髪の少年の駆ける。それを赤い髪の少年は一瞥するも別段気にした風もなく目の前の少女に向き直る。

左縛りの少女は赤い髪の少年が自分の間合いに入った瞬間に少年めがけて、その速さは華奢な身体からは想像も付かないスピードでハンマーを振り下ろした。少年はそれを予想していたのか軽く身体を右に反らしてそれを避けると自分の間合いまで入るべく走った。

少女の懐に入ると少年は横に構えていた剣を一閃した。当たったかのように見えた剣だったが少女が咄嗟に自分の武器から手を離しバックステップで避けていた。少年の完全に伸びきった手を見て好機と見ると少女は一足で打撃の間合いに入る。完全に隙を衝かれた少年は、しまったと言う顔をするが次の瞬間には宙を舞い1mほど後方に飛んでいた。

受身を取れず尻餅をついている少年に少女は間髪入れずにハンマーを拾い上げ振り下ろし頭の上で止めた。

少年は剣と盾を放り投げると両手を上に上げ降参の意思を示した。それを見て少女は加勢に向かうべく走り出した。

銀髪の少年は向かってくる少女に対して杖を一振りした。その瞬間少女の鎧に包まれていない部分からLPの光があふれ出した。少女は何が起きたのか一瞬で判断すると一直線に走っていたのをジグザグに走り始めた。少年は、どうしたものかと考えていると既に目の前に少女が居た。少女は腰を捻って正拳突きを放った。

少年はその一撃を身体を右に捻り避けるとそれと同時に杖を振りかざした。その瞬間少女の足が地面と一緒に凍結し動けなくなる。その一瞬少女が動けなくなったところに少年はダガーを首筋に当てた。そこで少女は苦笑しながら負けを宣言した。

左縛りの少女が加勢に駆けつけたときは既に勝負は決していた。銀髪の少年と対峙する少女には冷や汗が見て取れる。対する少年は涼しい顔で杖をクルクルと器用に回していた。

「まだ、やりますか？」

少年は杖を回すのをやめずにその目の前の少女に聞いた。少女はすこし考えると首を振った。

「やりますよ！」

そう言った瞬間少女が駆け出した。少女はジグザグに少年に向い自分の間合いに入ると横薙ぎにハンマーを振った。少年はそれをバックステップで避けると先ほどのように杖を翳した。それは先ほどの右縛りの少女を凍結させた魔法だったがそれを読んでいたのか少女はハンマーを振った勢いそのままに一回転しながら前進した。

少女の居た場所の地面は白く凍っていた。少年はそれに驚いた風も無くさらに後ろへ飛ぶと今度は杖を地面に突き刺した。その瞬間、回っていた少女の下が盛り上がったかと思うとそのまま少女を突き

上げるように激しく上下し始めた。

少女はその突き上げに耐えられず成されるがままに上下している。それを見た少年が杖を翳すと頭の上に直径2mほどの火球を作った。そして、笑顔で少女に対して放つ。

少女はどうすることも出来ずにその火球を食らい吹っ飛んでいった。

勝負が終わると野次馬達から歓喜の声が上がった。それは勝者にも敗者にも平等に与えられた賛美であった。

一部 ホーム

4人の戦いを見終わり他のプレイヤーがその場から離れていくのと同時にスファイア達もホームへ向かって歩き出した。

「さっきの戦いすごかったなあ。俺もあれくらい動けるようになりたいぜ。」

「そうですね、さっきの魔術師の子の凍結させていた魔法は興味があります。」

スファイアとクロガネは先ほどの戦いを見て触発されたのか、後でPVPをやるうなどと話している。

「そういえば、ホームはまだなんですか？」

ユリがそんな2人の言葉を遮るようにミベラに聞いた。

「そうね、後10分くらいで着くわよ。」

そう言いながら町外れの方へとどんどんと歩いていく。

「結構奥まったところにあるんですね？」

「そうねえ、マスターが騒々しいところが嫌いだから郊外に作っただけよ。」

暫く雑談をしながら歩いていくと他の家と外見は一緒だがそれより少し大きい建ての物の前でミベラは止まった。

「……よ。中に2、3人居ると思うけど気にしないで。」

そう言うと扉を開けた。部屋は20畳ほどの大きさで真ん中に四角いテーブルが1つとそれを囲むように椅子が置いてあり、部屋の壁際にはソファアがある。

ソファアには鮮やかな緑の短髪で寝ているのか目を瞑っている男と椅子に座って突っ伏して寝ているであろう黒髪の人がいた。

「やつほ、新人連れてきたわよ！」

ミベラがそう言うと2人は扉の方を見た。そして興味が無いのかそのまま元の姿勢に戻ってしまう。

「ちょっと！ 質問とか無いわけ？」

ミベラが、ありえないと言う様な態度を取ってスフィア達に振り向いた。

「ごめんね。あいつらギルド内でも一、二を争うほどの無口なのよ……」

そういうと2人の変わりにミベラはスフィア達に謝った。それすらも耳に入っていないのか2人は全く動作をしない。

スフィア達は内心やっていけるのだろうかと思っていた。

一部 ホーム(後書き)

うう、なんか上手く書きたいことが書けない……
ちよっと、奮起するためにお休みするかもしれない……

二部 歓迎会&It・上>

「お茶持ってくるから」

そういつとミベラは奥のほうへと消えていってしまった。

「ゲームの中でお茶って……」

スフィアは、初めての人間が聞いたら皆がそう思うであろう疑問を口にしていた。

「お茶って言うのはね……」

3人はテーブルの向かい側からかけられた声に一瞬ギョツとしながらそちらを向いて話を聞いている。

「緑茶で美味しいんだよ。おせんべえ……」

そういつとまたすやすやと寝息を立ててしまった。

その様子をキョトンと眺めていた3人に聞きなれた声がかけられた。

「はい、お茶。緑茶しかないんだけど。」

ミベラはそういつと3人に湯飲みに入ったお茶を目の前に差し出した。

「「「本当にお茶が出て来た……」」」

お茶が出て来たことに3人は声を揃えて驚いていた。
そんな3人を特に気にした風でもなくミベラは話を切り出した。

「とりあえず、新しくメンバーが増えたとその人たちの歓迎会をやることになってるの。」

その言葉を聴いてスフィアは目を輝かせた。顔にはうまいものが食えると書いてあるのは誰の目にも確かだった。

そんなスフィアを見たミベラは意地の悪い笑みを浮かべると一言。

「美味しいものなんて出ないわ。それに歓迎会って言ってもとって
もハードなの。」

それを聞いてスフィアはがっくりと項垂れた。しかし、ハードの
言葉が引っかかり質問をする。

「ハードってなんすか？」

その質問を聞いてミベラは先ほどよりもさら意地の悪い笑みを浮
かべた。

「賞金付きPVPよ。」

PVPその言葉を聴いてスフィアは広場での一戦を思い出してい
た。

ミベラは3人を見回すと『歓迎会』の説明を始めた。

「PVPと言ってももちろんハンデ付きよ。それに賞金は参加者か
ら徴収するんだけど『歓迎会』だからあなた達からは取らないわ。

あとは、開催は明後日くらいかなあ、その時に集まった人数でチー

△戦にするか個人戦にするか決める感じ。」

ほうほう、と3人は頷きながらミベラの話聞いていた。

「まあ、詳しいルールは明日するとしてその2人！ 挨拶無しで終わらせちゃうわよ？」

ミベラは先ほどから話しを聞いているのか聞いていないのか分らない2人対して呆れたように声をかけた。

声をかけられたソファアに座っている方は片手を上げ構わないという様に手の平をひらひらとさせていた。机の向かい側に座るもう一人は眠そうな顔を上げ一言。

「お茶があるのにおせんべえ〜……」

そういうと、また突っ伏してしまった。

そんな2人を呆れた顔で見たミベラは3人に向け申し訳なさそうに。

「そういうことだから明後日また紹介させるね。あと私もうログアウトだからまたね！」

そういうと白い光に包まれ居なくなってしまった。

後に残された3人はどうしようもないので自分達もログアウトしよう、と言うと白い光に包まれ消えた。

二部 歓迎会<中>

スフィアが最後にログアウトしてから2日後、スフィアは『F1ame Beast』ギルドルームの角に白い光と共に現れた。

スフィアが目を開け室内を見回すと知らない顔ぶれがいくつもあつた。クログネとユリはまだログインしてないようである。スフィアが3人の中では一番乗りだった様だ。

そんなスフィアを見て中央のテーブルに座っていたミベラが手招きをしている。スフィアはその様子を見てミベラの下へ近寄つた。

「は〜い、注目！ この子がこの間紹介した2人と一緒にギルドに入ってくれたスフィア君です！」

ミベラがスフィアを紹介すると周りのメンバーは食い入るような目で見ていた。スフィアはそれに圧倒され少し後ずさりをした後自己紹介を始めた。

「はじめまして、スフィアと言います。数日前に始めたばかりではないことが多いですがよろしく願います。」

月並みな挨拶を終えると一番奥に居た黒い短髪で緑の瞳にメガネを掛けた男性が口を開いた。

「はじめまして、スフィア君。私がギルドマスターのカンダです。よろしく願います。」

一礼するとスフィアの下に寄り握手を求めた。スフィアもカンダの握手を嫌がることなく応じると他のギルドメンバーも紹介をし始

めた。

「俺はルーシーって言うんだ。よろしくな！」 褐色の肌に銀の短髪で瞳は黒。顔つきからして女性の様だ。

「私はロック。よろしくお願いします。」 白色の肌に金の長髪で瞳は青。

「俺はガルシアだ！ よろしく頼むぜ！」 大柄の男で黒色の肌に黒のセミロング、黒瞳。なにかドカタのお兄さんを思わせる。

「……セインだ。」 鮮やかな緑の短髪で瞳も緑。最初に出くわした無口の片方だった。

「おせんべえ大好き、クロです！」 黒のセミロングで瞳も黒。最初見たときは男だと思ったが女の人だった。しかし、無口と聞いていた割に案外しゃべりそうだ。

「とりあえず、こんなところね。まだ他にもメンバー居るんだけど皆まだログインしてないみたいね。」

そうミベラが締めくくると同じくらいに先ほどスフィアが立っていた位置からクロガネが顔を見せる。クロガネは全員と既に顔見知りの様で挨拶を交わして椅子に座った。

スフィアもクロガネの横に座ると雑談を始めた。

それから30分ほど経った時にユリが現れ、ユリも他のメンバーに挨拶をすると2人の近くに行きそこに座った。

新人メンバーが全員そろったのを確認してからミベラは口を開いた。

「それでは新人歓迎会の概要を説明します。ルールは簡単。街の中央広場PVPエリアにてチーム戦をして勝ったチームに賞金。ハンデはLvダウン。以上！」

PVPエリアではハンデを付けられる。Lvダウンとは一番下のLvに全員のLvが合わせる形となる。スキルはそのまま使える。そのほかにLvアップや装備解除など細かく設定されている。ハンデは一人一人個別に付けられるものとエリア内全員との物に分けられる。

「チーム分けなんだけれども、3人1組が3組と残りの1人としません。」

ミベラの説明に新人3人以外のメンバーからは不満の色が顔に出ている。それを気づきながらもミベラは気にせず話を続ける。

「残りの1人になった人はハンデ無しの本気でいいから。あと3人1組の方は新人がばらける形ね。チーム抽選はグーチヨキパーで同じになった人。新人は3人で出し合って決めて残りの7人は全員でこのうち3人になったところじゃんけんして負けた人が1人で！」

そう足早に説明し終えたミベラの目に手を上げる人物が見えた。マスターだった。

「私が1人でいいですよ。」

その言葉にギルドメンバーは安堵の表情を作った。

「いいんですか？」

「構いません。さあ、抽選を始めてください。」

そう促され他のメンバーは抽選を始めた。程なくしてチームが決まる。

チーム『黒髪』

・クロガネ ・クロ ・ガルシア

チーム『ユリっぺ』

・ユリ ・ロック ・ルーシー

チーム『女王蜂』

・スフィア ・ミベラ ・セイン

チーム『ギルドマスター』

・カンダ

チーム分けが決まり新人以外からかけ金10000ガイスをミベラは徴収すると10人はPVPエリアへ向かっていった。

一部 歓迎会<中>(後書き)

ご意見ご感想ありましたらよろしくお願いします。

二部 歓迎会<下>(前書き)

私事により更新が遅れてしまっていてすいませんでした。

二部 歓迎会<下>

7人はPVPエリアに着くと思いいの武器を手にとった。

スフィアはソード。ユリは指貫グロブ。クロガネは赤い宝玉のついた杖。クロは弓。ガルシアは大剣。ルーシーは短剣。ロックは両方に多きな刃の着いたバトルアックス。セインはハルバード。ミベラはゴブリン戦で使っていた2本のダガー。カンダは薙刀。

各々使い慣れた武器を持ち、防具はスフィア達と合わせた格好をしていた。

「んじゃ、みんな準備が出来たようだし。レディ……………ゴー！」

ミベラの手が降ろされると歓迎会の幕が上がった。

スタート同時に『黒髪』はガルシアが先頭で『女王蜂』に狙いを定めた。

ガルシアが先頭を走りその後ろからクロが弓でクロガネが魔法による援護というオーソドックスな戦術。対する『女王蜂』はガルシアをスフィアとセインが止めミベラが後衛2人を襲撃する戦術を採った。

ガルシアが走りながら両手で持った大剣を振り下ろした。それと同時に目の前の地面が抉れながら3人に向かっていく。

「必殺！ だいちぎり 大地斬！」

「……………わざわざスキル名を言ってくれるなんてご苦労なことだ。」

セインはそういうと右に飛んだ。ミベラも状況を察してか左に飛

んだのだが状況が分らないスフィアは二人をきよるきよると見た後に後方に飛ばされていた。そのまま尻餅をついた形になっているスフィアに向けてクロが矢を雨のように降らした。ソレをセインはハルバードの柄の真ん中の方を持ちながら旋回させ矢を弾いていた。しかし、それが仇となりガルシアの間に踏み込ませてしまった。ガルシアは大剣を横薙ぎにセインに対して攻撃を仕掛けたがそれを起き上がっていたスフィアが受け止めた。スフィアはセインの前に立ち大剣の根元の近くで攻撃を受けたため大したダメージも無かったが先ほどの大地斬のダメージと相まって瀕死ギリギリである。ガルシアは一步後ろに下がりもう一度正眼に構え直した。何時の間にか矢の雨が止まりセインもハルバードを構えスフィアと共にガルシアに向き直った。

「二人掛りで相手してくれるとは嬉しいねえ。」

「……………」

「おい、セインなんとかいえ……つよ！」

ガルシアは言い切る前にスフィアに対して一步踏み込み袈裟懸に切り込んだ。その大剣をセインはハルバードで受けスフィアに攻撃が当たらないようにし更にガルシアの大剣を横に弾いて隙を作ろうとしたがガルシアは弾かれる方向と同じ方向に跳び極力隙を無くす様にした。

スフィアはガルシアが着地する隙を狙い切り込もうとしたが突如後ろから横薙ぎに切り込まれ退場となった。

その様子をガルシアとセインは驚きに目を開きスフィアに止めを刺した張本人を見る。

「本気でいいって言ってたものですから。」

カンドは笑顔でさういうと薙刀を脇に構えセインに対して突き出した。その刃はセインの胸に吸い込まれた。刃がセインから離れると同時にセインは退場した。

「さて、後はガルシア君だけですよ。」

「後はってどういうことだよ？」

「他の人はみんな退場しましたから。」

にっこりと笑うとエリア外に居るほかの面々を指差した。ガルシアはそれを見ると戦意が喪失したのか両手を挙げ降参のポーズをした。

結局歓迎会で優勝したのはギルドマスターのカンドだった。

二部 歓迎会<下>(後書き)

他チームの戦闘は後ほど息抜き程度で掲載したいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3368f/>

神樹ユグドラシル

2010年10月12日18時59分発行